TS（トータル・サティスファクション）を目指して　MII

「命令」と「指示」→「傾聴」「ハンドル渡し」「問い」

校長室担当より

　プロスポーツの世界では当たり前のようにトレーニングが行われます。それこそが自分を鍛え、自分の目標を達成する手段であるからだと思います。ただ、このトレーニングをなぜ行うのかということを納得した上で、行う選手は意外にまだ少ないのではないでしょうか。

　かつて日本のプロ野球からアメリカ大リーグへ行った大家友和選手。もちろん世界最高峰の舞台でプレーしたいという思いもあったでしょうが、彼によると「日本の監督やコーチの指導法が自分には合っていない」というのが理由の一つだったそうです。彼によると、当時の日本の監督やコーチは練習メニューを提示し、「やれ！」。「なぜこの練習が今の自分に必要なのか」を問うても、「とにかく、やれ！やれば、いいんだ。」だけしか言わなかったそうです。こうした「指示」と「命令」しかしない監督やコーチの中で、何を目標にやるべきかを見失っていた彼は、アメリカの教育リーグに参加しました。すると、そこには「命令」も「指示」もありませんでした。正解を押し付ける指導ではなく、まさに本人の気づきを基にした指導、「コーチング」が行われていたのです。シンプルな例が次のようなものでした。

　【例　コーチ「あなた自身は、今の自分に必要なトレーニングは何だと思う？」→大家選手「コントロールが定まらないので、それを改善するトレーニングだと思います。」→コーチ「では、何がいいと思う？」→大家選手「とにかく下半身を安定させるために走り込みするしかないですよね。」→コーチ「それはいいアイデアだ。」】

大家選手はこのコーチの下で、目標を立てて自分で納得したトレーニングに励み、メジャーで大活躍されました。コーチングの成果ですね。

　コーチングで大切なのは３つ。まずは「傾聴を徹底すること」で承認しているという安心感を相手に与える。そして「ハンドルを握らせること」で自分で状況を理解させる。その後に、相手の心へ響く「問い」（決して詰問ではなく）を重ねることで、意欲や勇気、自分自身のエネルギーを引き出す。教育コーチングは非常に有効です。生徒との対話の中で、ぜひ活かしてみてください。（令和６年１０月３０日）